

# 一筆啓上

惣 津 律 士

私達の社会は日と共にあわただしさを増して来ており、人数が多くなったせい、つまらないような仕事が続出し、御意見が多くてなかなかはかどらない。無駄のような会議が幾度となく開催され、尋常一様では解決しそうな問題が山積みして来ている。更に世の中が目まぐるしく変化するので、関係者はああでもない、こうでもないと問題をひねくり廻すために、神様から見ると神経衰弱症の徴候をだれもが示しているかも知れない。

こういった世の中に農村全体が巻き込まれているので、農村施策は中途半端に処理され勝ちであるが、これでもどうにもならないので、農業基本法に基き構造改善事業がはなばなしく登場して、これが今後唯一の農村解決策だと政府が折紙をつけておしまっている。

それはそれとしても、国、県の施策に対する不信の念はあちこちで聞かされるが、一方誰の力にも頼らず、ひたすら己の力で自立経営の健全化にいそんでいる農家が成功しているのは如何。

協業経営に不振のものが出ると、俺は元来協業経営は反対だったと言う無責任居士がいたり、養鶏界が不況になると、俺はあんな設備投資には反対だったと言う人が出てくる。

とにかく批判は誰にでも出来るが、さらばと行って、将来に対し確たる指針を与える人は少ない。そういった言いわけよりも、最も必要なことは損害を受けた農家の再建で、当面これに関係者は全力を注ぐべきであろう。それには勿論徹底的な解析の上に立った再建計画が樹立されねばならないが、その実施には相当の勇気と忍耐が必要である。一日も放置できないので、まず当局の英断を切望するものである。

私は会議出席のために、たまに上京すると、やたらに忙しく動いている人間群に出会っていらいらする。何であんなに急がねばならないのか。田舎者はね飛ばされそうである。役所に行くと日の当たっている課の連中はこま鼠のように動いている。

こんな姿を見ていると別の人間群のような気がするし、またきびきびしているというより、何かしら病的な動きを私は感ずる。はたして人間味のあふれた施策の立案なり、実施が出来るであろうか。立派な文句をつらねたアドバルーン施策がとかく行われて、その都度、農村は右往左往する。後の始末は知らぬとはまことに遺憾である。アフリカのシュバイツァー博士の如く、じっくり腰をおろして、農村社会の治療に専念する医師を求むるや切なり。